

せ と る

くおーたりー

C. E. T. L. Quarterly

教育・学習活動支援センター広報 No.13

発行日 16. Feb. 2004

卷頭言 JABEEの認定と教育改善

工学部長 山本 英夫

JABEE（日本技術者教育認定機構： Japan Accreditation Board for Engineering Education）は2001年度から、国際的な要求水準を満たした技術者教育を行っている大学の教育プログラムの本格的な認定活動を開始した。工学部としても認定申請を真剣に検討しなければならない段階に入ってきた。

JABEEの目的は、統一的基準に基づいた教育プログラムの認定を行うことによって教育の質を高め、わが国の技術者教育の国際的な同等性を確保することにある。そのために、2005年を目処にワシントンアコード（米、英、加など8ヶ国で構成する、認定制度の相互承認協定）に加盟することを目標に努力がなされている。

加盟が実現すれば、JABEEで認定された教育プログラムの修了学生は、加盟国の認定プログラム修了生と同等と認定され、国際的な技術者資格が与えられる。すなわち、修了学生の品質が国際的に認定されることになるので、その教育プログラムが認定された大学は、当然高い評

価を得ることになる。

ところで、JABEEが実施する審査は、今話題になっている第三者機関によって評価される「機関評価」ではなく、特定の教育機能を対象にした「プログラム評価」である。したがって、評価対象は4年間の教育プログラムが達成する教育成果（Educational Outcomes）であり、求められるのは、教育目標の達成を維持するための継続的な教育改善活動（Quality Improvement）の実施である。

認定基準は1から6まであり、骨子としては、①学習・教育目標の設定と公開、②学習・教育の量、③教育手段（入学および学生の受け入れ方法、教育方法、教育組織）、④教育環境（施設・設備、財源、学生への支援体制）、⑤学習・教育目標達成度の評価、⑥教育改善（教育点検システム、継続的改善）が掲げられ、補則として分野別要件が定められている。

これらの基準のもとに、認定作業は、教育活動の成果（Educational Outcomes）、教育活動の

有効性 (Educational Effectiveness)、教育活動の品質 (Educational Quality) に焦点が絞られてなされるものと思われる。

どれも真剣に検討しなければならないが、特に3番目の「教育活動の品質」が一番気になるところである。問われるものとして、厳密な成

績評価、個々の学生に対するケア、効果的な点検・評価・改善システム、効果的なFDシステム、などがあげられている。工学部としては認定申請するしないに関わらず、CETLの強力なサポートをいただきながら、早急に整備していくかなければならない課題であると考えている。

海外FD事情

——英国・ケンブリッジ大学のFD事情について——

法学部 宮崎 淳



写真1. キング・カレッジのキャンパス

1年間の在外研究期間をいただき、英国・ケンブリッジ大学で研鑽しています。同大学全体のFD事情を網羅的に述べることは、容易ではありません。それは、大学とは言ってもその実態はカレッジ（寮）と学部の連合体であり、大学教育は学部およびカレッジにおいて独自に行われているからです。したがって、いくつかの学部および講義の個別的な取り組みを紹介する

ことによって、同大学のFD事情の一側面について述べることをご容赦ください。

まず、ケンブリッジ大学が有している独自の教育制度について触れておく必要があります。学部教育の中で特徴のあるものは、スーパービジョンの制度です。これは、ある科目を履修すると、週2回の講義と並行して、少人数のグループ単位で指導を受ける機会を提供するものです。スーパービジョンの中身は、課題レポートが出来られ、それに対する具体的な指導を受けたり、講義の内容について一対一で確認または補完されたりと細やかな指導がなされる場合が多いようです。学生に聞くと、このスーパービジョンの準備が大変で、手が抜けないと異口同音に語ってくれました。また、学生はカレッジに所属することが義務づけられ、そこにおいて学生生活全般にわたって指導を受けるチュートリアルという制度が設けられています。したがって、

学生は幾重にも教員から個人的に指導を受ける機会が制度上用意されており、このようなシステムは大学教育の効果をあげるうえで大きな役割を担っています。

講義では、第1回目に詳細なハンド・アウト（シラバス）が配布され、これに基づいて進められます。このハンド・アウトを毎回の講義前にインターネットからダウンロードさせる科目もあり、そこでは受講前の最新の情報に言及していることも少なくありません。比較的少人数の講義においては学生の側からも頻繁に質問が出され、そこでの教員とのやりとりをみる限り、スーパービジョンがうまく機能しているように思われました。講義の形式は一対多数ですが、講義以外の見えない部分の教育がそれを下支えして、実質的には一対一の授業に近い形の教育がなされているように感じました。

学年末になされる学生アンケート（無記名式）については、毎年、学部の会議で質問項目の検討がなされます。私が所属する学部では、講義およびスーパービジョンに対する評価のみならず、学部図書館、学部事務の受付、コンピュータに関するサービス等について学生の評価および意見が収集され、授業ならびに教育環境の改善のための参考とされています。この学生アンケートの結果は、学生には公表されていません。アンケートは、授業および教育環境の向上のために実施するのであるから、その関係者に対して公表すれば十分であるという理由からです。

各学部は、年次単位でアニュアル・レポートを冊子にして発行しています。これをみると、

学部としての研究プロジェクトの成果、各教員の研究成果、大学院の学位取得の論文テーマ、学部主催のセミナー等が掲載され、学部の1年間の研究・教育の内容が概観できます。さらに、毎年、学外から学部の研究・教育について評価をうける制度があるのは当然のことながら、学内の学部や研究所間で相互に評価しあう制度もあり、外部評価より内部評価のほうがダイレクトで有益な助言がなされるとの理由で、学部によっては内部評価を重要視しているところもあるようです。



写真2. クライスト・カレッジのオールドライブラリー

教育制度や社会状況の相違もあるため、安易な移入は避けるべきでしょうが、FDの制度が緒についたばかりの日本の大学は、それを実施しつつ改善を重ねてきた外国の諸大学の経験から真摯に学ぶべき姿勢を失ってはならないように実感しました。

全学あげての教職員表彰式

工学部 戸田 龍樹



写真1. 大学構内

現在私が在外研究を行っているUniversiti Kebangsaan Malaysia (UKM) は、マレーシア国クアラルンプール特別区郊外のBangiという町にあります。Bangiはクアラルンプール特別区とクアラルンプール国際空港とを結ぶインテリジェントコリドーの中央に位置し、大学や多くの政府系研究機関が集まっています。UKMはUniversiti Malaya (UM) と並ぶ総合大学で、特に理工系ならびに医学系を中心に発展してきた大学のひとつです。

昨年10月にカウンターパートの教授より教職員の表彰式に招待され、式典に参列しました。この式典はすでに11回目を数え、大学の様々な分野において顕著な業績を残した教職員が毎年選出され表彰を受けます。大別するとExcellent Service AwardsとSpecial Quality Awardsというものがあり、Excellent Service Awardsの部門では各学部学科から推薦された教員、技官、秘書、職員、セキュリティガードにいたるまで様々な

人々が表彰を受けました。Special Quality Awardsの部門は、副学長のもとに評価委員会が設けられ、素晴らしい授業を行った教員 (Special Excellent Teaching Awards)、顕著な研究業績を残した教員 (Excellent Research Awards)、高く評価された出版物を著述した教員 (Publishing Awards) などに対してそれぞれ賞が与えられていました。面白いところでは、最も研究費を取ってきた教員 (Awards for Research Grants) や、最も親切な対応をした窓口職員 (Best Excellent Counter Service) に対する表彰もありました。またこれらの賞には日本人としては馴染みにくい面もありますが、副賞として大学から賞金小切手が贈られていました。その額は想像におまかせするとしても、受



写真2. 左が戸田先生

賞された職員の方々は口をそろえて、これから の仕事のいっそうの励みになるということを喜んで語っていました。

このような表彰は、真摯に仕事をしている教

職員の励みとなり大学や社会に対する貢献を自覚する非常によい機会になっているのではないかと思えました。日本の大学でも、公平性に対

する阻害の懸念を持つだけではなく、このようなシステムの積極的な導入を具体的に考える時期にきているのではないかと思います。

FD講演会報告－適正な成績評価とは－

昨年12月2日（火）に田中義郎教授（玉川大学教育学部）を講師にお招きして、本年度第二回のFD講演会が開催された。

講演テーマ「適正な成績評価とは－成績評価と教育の質の保証」は、現在大学教育の重要な課題の一つとなっている。田中教授には、高等教育を専門に研究を積み上げられてきた成果から、大学の成績評価の適切性に関しての貴重なご提案を述べていただいた。

評価は本来学生の学びを促すために用いられるとの考えは、本学の成績評価のあり方を模索

する上で重要と思われる。

講演会の感想が教育学部の吉川先生と文学部の杉山先生から寄せられた。



FD講演会の感想

教育学部 吉川 成司

評価は、教育システム全体にかかる複合的な課題である。また、教育システム全体の特質を反映する。したがって評価とは、点の付け方という単なる技術的な問題だけではない。まして、最後に残る面倒な仕事ではない。本来、教育としての評価は、事前に実態を把握したり、途中経過を把握したり、目標を示してモチベーションに働きかけたりと、学生の学びを広げ、伸ばすことに、その役割があるのであろう。

ワークショップでは、評価の労力ともいうべきことが話題の一つにあがった。確かに、履修者や授業担当の過多は、評価に多大な労力をかけることになる。しかし、問題は、このような事態そのものなのである。このような意味において、評価を教育的なものにしていく基盤整備として、開講科目を精選することが必要となる。こう述べると、学生が多様化しているのだから、教育内容は多様化しなくてはならないのではな

いか、との反論がでてこよう。しかし、学生の多様化に教育内容の多様化で対応することには限界がある。この論理だけだと、個別化に行き着かざるを得ないからである。多様化以上に考えるべきは、多くの学生に幅広く必要とされる

授業や教材の開発ではないだろうか（もちろん、各教員の裁量というか個性を生かすことを忘れてはならないが）。ともあれ、よき機会を設けてくださった教育・学習支援センターに感謝を申し上げたい。

FD講演会に参加して

文学部 杉山由紀男

正直に申し上げて、元来私は、大学における成績評価は、公平であるべきだという点を除いては、あまり重要なことと考えていなかった。「卒業」が就職など今後の進路のための資格いわばパスポートとしてしかほとんど機能していない現実のなかで、「成績」もまた同様の意味しか担えない、担っていないのではないかと感じていたからである。大事なことは、そのような資格ではなく、学ぶこととその結果としての広い意味での人間的成长であり、成績については教員も学生も、互いの努力の指標の小さな一つぐらいのつもりで、おおらかに捉えていきたいものと思ってきたのである。それゆえ、成績評価により敏感になっている最近の学生の傾向を、必ずしも好ましいものと感じていなかった。

講演会に参加して、いろいろ勉強させていただいた。そして、「適正な成績評価」は、学生がますますこれを要求するようになっているという理由からではなく、教育目的の明確化・到達目標の明確化・到達度の測定・より良い教育の実現という教育活動の最低限の責任を、教員と

して自ら積極的に果たす行為であり、またその責任の自己点検作業であると感じた次第である。大学と教員が一生懸命に教育サービスを提供しなくとも、たくさんの学生が押し寄せたかつての時代に身につけた“殿様商売”的スタイル、すなわち教えることだけ教えて学生がそれをどこまで受け取ってくれたのかにはあまり意を用いないようなやり方は、教員として、いまや、否本来、無責任の極みなのであろう。

ヨーロッパ中世に「大学」が登場して次第に制度化されていくそのかなり早い時期から、学生はまず基礎学術や教養等の知的訓練を受け、そうした知的形成を経た者だけに神学や法学、医学などの専門的訓練が許されるというシステムがとられたようである。到達目標の明確化とその測定は、大学の始原にあってすでに行われていたと言える。私もまた、そうした意味で原点に立ち返り、その今日的な意義と方法を勉強し、踏まえながら、「適正な成績評価」を実現していきたい。

「お試し版、勉強法ワークショップ」開催

去る2月2日から3日間にわたり、学生中心の大 学づくりの一環として、学生の学習技能向上を 図る取り組みが行われた。「お試し版、勉強法ワ ークショップ」と題して、連日午後1時から4 時までの約3時間、12名の学生が真剣に勉強法の 研鑽に励みました。

この取り組みは、「後輩に勉強方法についてア ドバイスできる先輩になろう」、という教育学 部・学部企画の有志がCETLの協力を得て行った ものです。内容は、

- 1) ノートの取り方
- 2) LTD学習法による予習の仕方
- 3) 建設的な討論の仕方、の3つです。

講師を担当した教育学部の関田助教授（CETL 副センター長）は、「学生による自主的な学びあ い、特に先輩が後輩を刺激していく係わり合い は創価大学のよき伝統であり、その流れを太く 強くするためにセンターができるこことを模索し

ています。今回のワークショップもそうした試みの一つです。期末試験が終わったばかりで、単位にもならない勉強会に3日間参加してくれた学生の熱意には本当に感謝しています。」と感想を述べています。

参加した学生は大満足の様子で、「3日間で学ぶことが楽しくなった気が少しします！」「3日前の自分より前進していると確実に言えます。」「後輩にしっかり伝えていきます。」など全員から感想が寄せられた。今回のワークショップがとても楽しく有意義であったことがうかがえる。

「学生中心の大学」を目指して様々な活動を 繰り広げるCETLは、学生の学習を地道に支援す ることに加え、今回のCOL選定を励みにして、更なる挑戦を開始しています。3月5日には授業 改善に真剣に取り組む先生方と一緒に、FDワー クショップが開催されます。

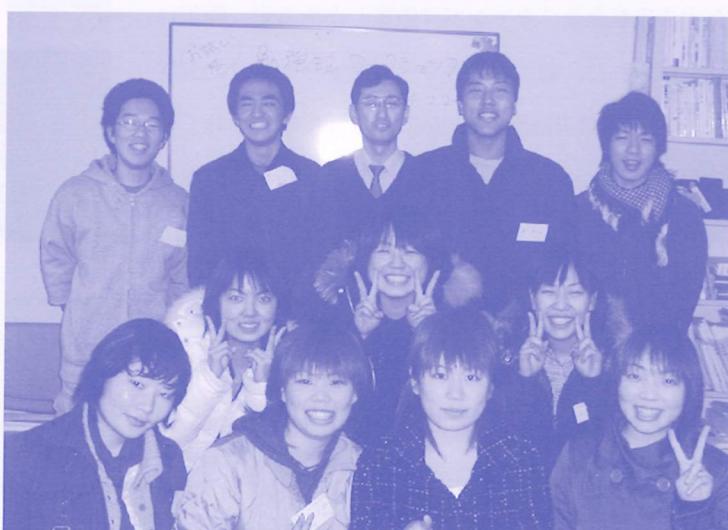


写真 参加してくれた学生

特色ある大学教育支援プログラム選定記念 創価大学FDフォーラムを開催

本学の特色ある大学教育支援プログラム選定を記念して、3月5日（金）本部棟においてFDフォーラムが開催される。

3つのセッションが用意された教授法ワークショップでは、本学教員による授業技法の紹介・提案が行われる。それぞれのセッションに、佐々木一也教授（立教大学）、安永悟教授（久留米大学）、杉江修治教授（中京大学）をコメントーターにお迎えして、活発な議論が展開される。本年度から経済・経営学部の基礎ゼミの授業方法に、協同学習法やLTD学習法が積極的に実践されている。「学生中心の大学」の理念を反映させ、一方的になりがちな講義だけでなく、学生

の主体的な学びを目指している。

続いて、国際基督教大学の鈴木寛教授（同大学FDセンター主任）による記念講演が行われる。FDをめぐる問題、将来の展望が明らかにされるものと期待される。なお、ファーラム終了後にはレセプションが開催され、教育関係者の幅広い意見交換の場が提供される。

参加申し込み・問い合わせ先

CETL 担当 滝川

e-mail (takikawa@soka.ac.jp) またはファックス (0426-91-9303) にてご連絡下さい。なお、Webからの申し込みも可能です。

<http://www.succ.soka.ac.jp/CETL>

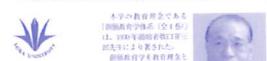
文科省の『大学と学生』に創価大学が紹介

文部科学省が発刊する『大学と学生』には、様々な大学のキャンパスやその雰囲気を紹介する連載企画「キャンパス散策」があるが、昨年11月号では本学が取り上げられた。創立者のカラー写真から始まり、大学の全容、短大、SUAなどの教育実践が3ページにわたって紹介されている。なお、同号では坂本センター長も本学の教育・学習支援の取り組みについて執筆している。

編集後記

3月5日にはFDフォーラムが開催されます。COL選定の実績を出発点と捉えて、さらなる教育支援プログラムの開発を目指します。そのようなCETLの挑戦は、「学生のための大学」の理念を追求した大切な試みだと思います。（U）

キャンパス散策（創価大学）



創立者 岩城一也（さかい かずや）として、中高生には「西園寺公望の孫」といはる。パン屋を経て、私費のほか、第一回の建築費を自ら出し、1940年に「大藏の新帝学園」（フリーランス）として開校。1942年に「創価大学」へ改名。創立者は岩城一也（さかい かずや）として、中高生には「西園寺公望の孫」といはる。パン屋を経て、私費のほか、第一回の建築費を自ら出し、1940年に「大藏の新帝学園」（フリーランス）として開校。1942年に「創価大学」へ改名。

門標
創立者岩城一也先生の肖像。
（写真：岩城一也先生の遺族）



全景写真 別府市立大分モントルのキャンパス

C. E. T. L. Quarterly No. 13

編集・発行
創価大学 教育・学習活動支援センター
〒192-8577 八王子市丹木町1-236
Tel: 0426 (91) 9782 内線 2148
E-mail: cetl@soka.ac.jp